慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカの夢
Sub Title	An American dream
Author	山本, 晶(Yamamoto, Sho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.40, (1980. 9) ,p.109- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・ 文学と都市
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00400001-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカの夢

「昔、アメリカについての夢があった。つまり、アメリカの夢だ。アメリカは変わるはずだった。自由な、善良な、自由で善良な国になるはずだった」

——ジェイムズ・キューナン『いちご発言』（一九六九）

山本　晶

初めに　山の上の町（一六三〇）
第一話　ブルックリンの渡し（一八五二）
第二話　戦いの祈り（一九〇四）
第三話　卵（一九二一）
第四話　見えぬ存在（一九五二）
第五話　闇に戦う愚かな軍勢（一九六八）
結びに　加州ホテル（一九七六）

初めに　山の上の町（一六三〇）

アメリカ合衆国は、国の起源がはっきりしているところに一つの特色があると言ってよいだろう。アメリカ人は明確

な理想、一つの夢を抱いて新世界に植民地を創設したのだ。例えばマサチューセッツ湾植民地の名総督と謳われたジョン・ウィンスロップは一六三〇年、移民船アーベラ号上で次のように説教している。

> われらは山の上の町のごときものにならねばならぬ。万人の眼はわれらが上に注がれている。故に、すでに着手せるこの大業において、仮りにも神を欺くがごとき所業を行ない、ために現在の天佑を失なうがごとき仕儀にいたれば、われらは世界の語り草、物笑いの種となるであろう。（傍点添加）

ここに言う「山の上の町」（a City upon a Hill）とは、もちろん山上の垂訓に見える「なんじらは世の光なり、山の上の町は隠るることなし」（マタイ伝五章一四節）の一節に依拠している。言わば新世界の草創期に、アメリカ人はおのが国に全世界の仰ぎ見る亀鑑を建設しようとする、確固たる信念に満ちた使徒として歩み始めたのだった。

周知のように、その植民地も祖国イギリスに反旗を飜し、一七八三年パリ条約によって国際法的に独立が承認されたわけだが、その前年ロンドンにおいて、『あるアメリカ農夫の書簡集』と題する書物が刊行されている。この書で著者ミシェル・ド・クレヴクールというフランス人は、こう述べている。

> まことに「食物のあるところ祖国あり」（ubi panis ibi patria.）とは、あらゆる移民の金言である。では、この新しい人間、アメリカ人とは何者だろうか。アメリカ人とは、ヨーロッパ人かヨーロッパ人の子孫、つまり他国には見られぬ、あの奇妙な混血人なのだ。例えば、ある知り合いの家族などは、祖父がイギリス人で、その妻はオランダ人。両者の息子はフランス女性と結婚。その間に生まれた四人の息子は、それぞれ別々の国の女性を妻としているという具合だ。
>
> 昔からの考え方や風習を捨てて、新たに受け容れた生活様式・新たに戴く政府・新たな考え方と風習とを身につけた者――これがアメリカ人である。つまり、この土地の偉大な「育ての母」の広い膝に抱かれることによって、アメリカ人となるのだ。ここアメリカでは、あらゆる国の人間が融け合って一つの新しい人種を形成してお

り、こうした人びとの尽力と子孫とは、いつの日か、この世界に大いなる変革を惹き起こすことになるだろう。

（第三信「アメリカ人とは何か」）

ここにはアメリカのもう一つの特色、つまり「多数から成る一体」(e pluribus unum) という事実が指摘されているほか、先に挙げたウィンスロップの発言にも通じるような、将来アメリカが世界において果たす役割が、早くも驚くべき確信をもって予言されている。

世紀が変わり、第二の独立戦争とも呼ばれる一八一二年の戦争をしのいだアメリカは、それまで東を見ていた眼を西へ転じた。アメリカ東部の都市は一八二〇年以降、産業の勃興、エリー運河の開通、鉄道の伸展と共に急速に発達した。殊にニューヨーク市は一八二一年の運河開通により北部の商業中心地となった。十九世紀初頭、都市の住民は全人口の約四パーセントであったが、南北戦争（一八六一―六五）直前には、その四倍強にも増加していた。経済の発展と並んで文化の発達も目覚ましく、アメリカ独自の文学が開花し、エマスン、サロウ、ホーソン、メルヴィル、ホイットマン等の作品に結実した。

第一話　ブルックリンの渡し（一八五二）

こんにち、ニューヨーク市の中心マンハッタン区と、その東端を劃すイースト・リバーの対岸ブルックリン区とを結んで、有名なブルックリン橋がある。ニューヨーク湾に臨み、一八八三年に開通した当時世界最長の吊り橋は、アメリカ工業力の象徴であるばかりか、アメリカそのものの象徴ですらあるとも言えよう。

バビロンに架空園、エジプトにピラミッド、アテネにアクロポリス、ローマにアテナ神殿があるように、ブル

ックリンにはブルックリン橋があります。（一八八三年五月二十四日、広告）

アラン・トラクテンバーグ著『ブルックリン橋――事実と象徴』（一九六五）は、この橋を題材にしたアメリカ文明論であり、ハート・クレインの長詩『橋』（一九三〇）に訌われ、アーサー・ミラーのピューリッツァ賞受賞作『橋からの眺め』（一九五五）でイタリア移民の沖仲仕一家を見舞う悲劇の背景となっているのも、この橋である。これがなかった頃は、両岸を結ぶに渡し船がかよっていた。

ホイットマンの代表作『草の葉』中、四大詩に数えられる「ブルックリンの渡しをわたる」（一八五二）は、夕方ブルックリンでの仕事を終えて、マンハッタンのマイホームへ帰る勤め人を満載したフェリー甲板で、詩人の眼に映る周囲の景観や、心に浮かぶ想念を綴った自由詩だ。言ってみれば、これは都会のラッシュアワーを描いた世界最初の文学作品なのである。

ふだん着の男や女たちよ、君たちはぼくにとって、いかにも面白い存在だ
フェリーに乗って川を渡り、家路につく何百という群衆、君たちは自分で思う以上に、ぼくの興味を惹く存在なのだ（三一―四行）
今から五十年のち、他の人びとがここを渡りながら、［この景観を］眺めることだろう、あと半ときで沈む太陽を見ていることだろう
今から百年のち、あるいは何百年も何百年ものちに、他の人びとが［この景観を］眺めることだろう（一一七―一一八行）

すし詰めの車内で手近のポスターでも眺めているほか、なすすべもない現代の通勤者と異なり、当時は、少なくとも詩人には、時空を超えた人びとに想いを馳せ、その人たちとの一体感を覚えることも可能だった。もっとも、めざす目的駅に着くまで、あなた任せでいるしかない状況は今も昔も変わりない。

君たち［未来の人びと］が手すりに寄りかかって立たずみながら、しかも急流と共に急いで行くように、ぼくも
立たずみながら急行したものだ（二五行）
堅固であってくれ、川を見おろす手すりよ、ぼんやりと寄りかかりながら、速い流れと共に先を急ぐ人びとを支
えるために（二一三行）
栄えよ、幾多の都市よ――船荷を運び、眼を若く景観を示せ、豊かに満々と流れる川よ
拡大せよ、恐らくはこれ以上に霊的なものはない存在よ（一二三一四行）

ここで言う「川を見おろす手すり」(rail over the river)を、有島武郎訳は「河沿いの欄」とし、長沼重隆訳は「河畔の柵」としているが、正しくはフェリー舷側の手すりを指す。それはともかく、この詩は別題を「日没の詩」と言い、一日の黄昏どきを謳った作品であるが、詩人は時として自己の内面に湧き起こる疑念や、暗黒の影を落とす邪悪なものの存在を容赦なく剔抉してみせる。本誌所載シンポジウムのあと、英文科学生の質問にたいし、池田彌三郎教授が「わが国では、夕方は魂がさまよい出る時」と説明されたことを想起すると、いっそう興味深い。だが、全体的に見れば、この一三二行から成る詩は、現在の讃美と未来への希望とに満ちていて、夕方から夜にかけての時刻を謳いながら、明るい、雄渾な、格調高い作風を示している。

ああ、林立するマストに囲まれたマンハッタンよりも、ぼくにとって堂々とした、すばらしいものがほかにあろ
うか（九二行）
落日に染まる華麗な雲よ、ぼくや幾世代もあとの男女に、お前の目ばゆい光を浴びせてくれ
岸から岸へと渡れ、数知れぬ船客の群れよ
屹立せよ、マナハッタの高きマストよ、聳え立て、ブルックリンの美しい丘よ（一〇三一五行）

ここにおいて都会人と、都会と、都会から望む自然とは「これ以上に霊的なものはない存在」と推量されていて、ほ

とんど手ばなしの楽観的態度を見ることができる。ブルックリン橋が開通した翌年、アメリカの自由と博愛にもとづく革命理念を鼓吹されたフランス国民は、アメリカ国民に自由の女神像を贈り、それはアメリカの入口、ニューヨーク湾頭に建てられた。

第二話　戦いの祈り（一九〇四）

「拡大せよ」と、ホイットマンは高らかに謳った。まことに、拡大主義こそアメリカの「明白な運命」（一八四五年、ジョン・オサリバンの言葉）であった。ホイットマンはまた「ぼくはアダムの歌の歌い手／新しい楽園の西部をゆき、あまた偉大な都市に呼びかける」（「アダムの子供たち」）とも謳っている。だが、ディー・ブラウン著『わが魂を聖地に埋めよ』（一九七〇）にも明らかなように、拡大の陰には、インディアン放逐または虐殺の裏面史が潜むことも忘れてはならぬ。合衆国は一八〇三年のルイジアナ購入により版図を倍加、メキシコ戦争（一八四六―四八）により極西部を国鳥ボールド・イーグルの翼下に収めた。この戦争の発端は、敵国をじらして先に手を出させ、返り打ちにする点で、太平洋戦争の発端と図式がよく似ている。

一八九三年、アメリカ歴史学会において、フレデリック・ジャクソン・ターナーは「アメリカ史におけるフロンティアは消滅した。かくして、この消滅と共にアメリカ史の第一段階も終焉を告げた」と宣言した。だが、フロンティアは決して消滅しなかった。アメリカ人はそれを海外に求めたのである。一八九八年、キューバのハヴァナ湾で米艦メイン号が謎の爆発を起こしたことを契機に、米西戦争が勃発した。この事情もまた、ベトナム戦争の発端とされたトンキン湾事件を想わせるところがある。いずれにしても戦争はわずか半年で終結し、アメリカはプエルトリコとグァム島を獲得、フィリピンを買収することができた。時の国務長官ジョン・ヘイは、これを「すばらしい小さな戦争」と呼んで驚

喜した。

マーク・トウェインこと、サミュエル・ラングホーン・クレメンズの短篇「戦いの祈り」は、具体的にいつの時代、いかなる国の話とも明らかにしていないが、一九〇四―五年と推定される創作時期からみて、先の米西戦争を下敷きにしていることは間違いあるまい。

国は好戦的気分に湧き立っていた。家々には国旗が翻り、大通りを毎日、若い志願兵が威風堂々、隊伍を整えて出征して行く。その晴れ姿を親きょうだいや恋人たちは誇らしげに見送った。戦争に異議を唱える者もないではなかったが、ほんの一握りの異分子に過ぎず、周囲から怒りの警告を受けて身の危険を感じ、姿を隠してしまった。

ある日曜日の朝。明日は大隊が前線へ向かう日とて、教会では大勢の信者がミサに列席していた。志願兵の姿も見え、顔を輝かせて、祖国のために勇敢に戦うことを夢みている様子。満堂を揺がすオルガンの響きに、会衆は一勢に起立して神への祈りを唱和した。牧師が長い祈りを捧げた。われらが高貴な若者たちを護り給え、完膚なきまでに敵を撃滅させ給え、祖国に栄光をもたらせ給えと、その祈りはかつて耳にしたこともないほど美しく感動的だった。

そこへ一人の見知らぬ老人が入ってきた。長身に寛衣をまとい、肩まで垂れる白髪、この世ならぬ蒼白の相貌。一同注視の裡に説教壇を踏まえた老人は、おもむろに口を開き、「わたしは神から遣わされて、次のメッセージを伝えに来た」と言った。満堂を衝撃が走った。「あなた方の祈りは神の耳に達した。だが、その祈りの裏には、もう一つ別の祈りが潜んでいることを知らぬか。あなた方が自国の勝利を願って祈った時、それと同時に、あなた方は敵国の山野に敵兵が空しく斃れ、重傷に呻き、無辜の妻子が夫や父を失ない、飢えに苦しみ、焦土をあてどなくさ迷うことをも祈ったのだ。確かにそれでよいのか。愛の源たる神は返事を待っている」

のちに人びとは、あの老人は気違いだ、まるでおかしなことを言う、と思った。

わずか千二百語にも満たぬ「戦いの祈り」は、緊密な構成のもと、磨き抜かれた散文詩とも言える文体で貫かれた傑

作である。知人ダン・ビアードの伝えるところによれば、クレメンズはこの作品を原稿の段階で娘のほか数人に読んで聞かせたが、みなに、瀆神的と解釈される懼れがあるから出版すべきではない、と勧告されたという。ビアードが「でも、やはり出版はするんでしょう」と尋ねると、クレメンズは部屋を行きつ戻りつ暫く考えたすえ、「いや、わたしはこの作品に真実を余すところなく語ってしまった。この世で真実を語れるのは死者だけだ。わたしが死んだあとなら出版してもよい」と答えた。最近わが国の「K・ハマダ事件」に関する報道で、慶應義塾出身の与党幹事長が「死んでも言えないことがある」と述べたというのとは対照的である。クレメンズは一九一〇年に没し、「戦いの祈り」は一九二三年に刊行された。

大通りを毎日、志願兵が隊伍を整えて出征して行くとすれば、作品の舞台は都会であろう。人びとは一つのキリスト教国が別のキリスト教国と戦う矛盾を鋭く指摘した神の使徒を「気違い」と断定した。アメリカでは、十七世紀の「もっとも誠実なキリスト教徒」だったロジャー・ウィリアムズが、当時は「社会の敵」とみなされて追放されたという先例がある。わが国では林通義・佐野芳子編『近隣騒音』（公害出版シリーズ、一九七四）によると、騒音加害者は抗議する被害者を「気違い」と罵るそうだ。また水俣病の五井事件で、アメリカの写真家ユージン・スミスは、汚染会社の人間に殴打されて失明寸前の傷を負った。「預言者は故郷に容れられず」――いつの世でも、人びとは真実を明かされるのを好まぬものらしい。

第三話　卵（一九二一）

アメリカ史には、ピューリタニズムにもとづく精神主義と、俗世間的な成功を希求する物質主義の二つの流れがあ

る、とはよく指摘されるところである。後者は前者に裏づけされていると言ってもよい。マイクル・G・カメンのピューリッツァ賞受賞作『逆説の国アメリカ』(一九七二)第四章にも引かれているように、有名な哲学者ジョージ・サンタヤーナはアメリカ人を「物質的なものに関心を抱く理想主義者」と規定した。

大都会であろうと、小村であろうと、成功への飽くなき欲求に取り憑かれるアメリカ人は少なくない。アメリカでは、しばしば村と町の区別が定かでなく、「スモールタウン」の概念は村から、ちょっとした都会までを含む。ニクソンが「声なき声」と呼んで頼りにした保守階層の住むスモールタウンを無視することはできず、良くも悪しくも、そこにこそアメリカが存在すると言えるのである。従って、ヴィディッチ＝ベンスマン共著『大衆社会におけるスモールタウン』(一九五八)のような社会学的研究、ホネカー・ヘロン著『アメリカ文学におけるスモールタウン』(一九三九)のような文学史的研究が行なわれ、またクック＝スウォーガー共編による同題のケースブック選集(一九六九)にレゾン・デートルが生まれる。

現代アメリカ文学の源流シャーウッド・アンダソンの名作短篇「卵」(一九二一)は、ローカル沿線の町で、マイダスの手を持とうとこころざした男の話である。

> わたしの父は、生まれつき陽気で親切な、なんの屈託もない人だった。三四歳になるまで、オハイオ州のトマス・バタワースという人の農場で、作男をして働いていた。土曜日の夜、ビドウェルの町へ出て、酒場で飲んで騒ぐのが唯一の楽しみだった。
>
> それが三五歳の春、田舎の学校で教師をしていた母と結婚し、翌春わたしが生まれると、事情が変わった。父は、立身出世したいという、あのいかにもアメリカ的な願望に取り憑かれたのだ。それは母の影響と言ってよいだろう。父は農業をやめ、新たに土地を借りて養鶏業を始めたのである。ところが、これは見事に失敗した。今

日わたしに多少とも暗い影があるとすれば、それはきっと、楽しかるべき少年時代を養鶏場なんかで過ごしたせいである。

鶏というやつは、実に頼りにならないシロモノである。卵から孵ると、ひよこのくせに餌をしこたま喰ったあげく、いろんな病気に罹って、大部分が死んでしまう。たまに神さまのお恵みで、何羽かの牝鶏と一羽の雄鶏がやっとのことで大きくなるが、その牝鶏から生まれた卵が同じような運命を辿るというわけだ。かくて輪廻というものが成立するのである。鶏の一生は人間にそっくりだ。世にいう哲学者とは、きっとみんな養鶏場の出身に違いない。

さて、ひよこと共に苦節一〇年、さっぱり芽が出なかった父は、養鶏場をたたんで、ローカル線の寄るピクルヴィルという町へ出ると、今度は飲食店を始めた。これも母の考えからだった。母はわたしが町の人間になって出世して欲しかったのだ。両親は一所懸命になって、店をそれらしい構えにしつらえようと努力した。店の看板には、店名の下に「お食事は当店で！」と大書した。だが、ふつごうなことに、この勧誘に従う人はめったにいなかった。

この飲食店が失敗したのも、卵のせいである。ある晩ジョー・ケインという若者が、南部から父親が乗ってくる汽車を待って店にいた。父はこの客を精いっぱいもてなして、店のために良い評判を獲得しようと思った。コロンブスの卵の話、ありゃインチキだ、わたしが掌の中で揉むだけで卵を立ててご覧に入れましょう、何しろ卵にかけちゃわたしは専門家なんで、と言って試みたが、卵はいっこう立ってはくれぬ。第一、客の方がそっぽを向いていた。かくてはならじと、養鶏場時代に保存しておいた奇形の鶏のアルコール漬けを見せた。客は胸が悪くなって、出て行こうとした。父はあわてて、コーヒーと葉巻を自前で出すと、卵を酢で柔かくして、細いビンの首を通し、そのビンをお客さんに進ぜましょう、と言った。懸命に試みているうちに、汽車がはいって来た。客は出て行こうと戸口に向かう。父は死にもの狂いで最後の一押しをした時、卵が割れた。客が振り返って笑った。父はかっとなって、別の卵を投げつけた。客はうまく体をかわして、出て行ってしまった。またしても父は敗れ、卵の勝利となったのだった。

広い意味で、成功を求めて敗れる者の挫折の系譜は、アーヴィングの秀作短篇「悪魔とトム・ウォーカー」(二一八)から、メルヴィルの味わい深い小品「幸福な失敗」(五四一八)、ドライサーの代表的長篇『あるアメリカの悲劇』(二五一九)――映画『陽のあたる場所』(五一一九)の原作――を経て、エリスンの傑作『目に見えぬ者』(五二一九)にいたるまで、アメリカ文学史に一貫して辿ることができる。その意味でも、最近公刊されたワシントン大学(シアトル)教授マーサ・バンタ女史による浩翰な著書『アメリカにおける成功と失敗――ひとつの文学的討議』(七八一九)は、この流れを辿った注目すべき研究と言ってよいだろう。

第四話　見えぬ存在(一九五二)

かつてアメリカの諸大学における専門家の間で、第二次大戦後アメリカが生み出した最高の小説は何かというアンケートが行なわれた時、黒人作家エリスンの『目に見えぬ者』がベストワンに選ばれた。翻ってわが国では、原作出版から十年近くのちに邦訳がようやく陽の目を見、さらに十三年もたって文庫本になったが、それから六年たった現在、再版も出ていない。物質的・風俗的にアメリカ化のはげしい日本において、文化の受容に見られるこの偏頗はどのように説明すべきであろうか。

クレヴクールが規定した混血人種「アメリカ人」は、黒人を勘定に入れなかった。エリスンの作品は、白人優位の国で経済的・政治的・社会的に存在を認められぬという意味で「目に見えぬ」黒人青年が、人生に未経験だという意味で「目が見えぬ」人間でもあったために、南部の大学町と北部の大都会におけるさまざまな盲目的経験を通じて、言わば目からウロコが落ち、自分が「目に見えぬ」存在であることを痛感するにいたるという、開眼(かいげん)の物語である。

この開眼（イニシエイション）のテーマは、ホーソンの名作短篇「ぼくの親戚モリヌー少佐」（一八三）や「若いグッドマン・ブラウン」（一八三五）、メルヴィルの最高作との見方もある中篇「ベニト・セレノ」（一八五五）以来、アメリカ作家に繰り返し取り上げられてきた。それは更に旧世界をブタ箱に、新世界をエデンの園に見立て、アメリカ人を無垢のアダムになぞらえる「楽園神話」とも関わってくる。これを基本に論じたのが、R・W・B・ルーイスの『アメリカのアダム』（一九五五）であり、これを批判したのが、D・W・ノーブルの『永遠のアダムと新世界の楽園』（一九六八）である。

賛否いずれの立場をとるかは別にして、少なくとも『目に見えぬ者』においては、語り手の主人公（名前は与えられていない）が属していた南部黒人大学のキャンパスは、あたかもエデンの園のように美しい。だが、白人後援者を相手に大失策を演じた主人公は、黒人学長により北部のニューヨークへ体よく追放（the Fall）されてしまう。北上するバスの中から、ふと道端に目をやると、すばやく消えてゆく蛇の姿があった。

生き馬の目を抜く大都会で、「アダム」は次々とリアリティの擬態に裏切られる。無垢の人間には現実の表装しか目に映らず、その下に横たわる実相に達することができない。これも十九世紀以来、アメリカ作家がしばしば扱うテーマであり、事実『目に見えぬ者』のエピグラフには、T・S・エリオットの詩劇『一族再会』（一九三九）からハリーの台詞「君はおれを見ているわけじゃない。そんなふうに、にやにや笑いかけている相手だって、おれじゃないよ・・・もう一人別の人間だ」と共に、「ベニト・セレノ」の一節が引用されているのだ。

黒人青年は比喩的にも現実的にも常に走っている。いや、走らされている。学長がくれた紹介状は「この者を、死にいたるまで希望を抱かせ、走り続けさせてください」と言うに等しい内容だったことが、のちに判明する。英語では、「走る」も「逃げる」も、同じく“run”と言う。筑波大学の岩元巌教授は『現代アメリカ小説』（一九七九）の中で、『走れ

ウサギ』(一九六〇)などジョン・アプダイクの作品を「逃亡小説」と名づけておられるが、これまたアメリカ文学の典型であって、ライト・モリスも『前方の領域』(一九五七)において夙に指摘したことであった。

「アダム」は最後に暴徒に追われて逃げるうち、マンホールに文字通り「落ちる」のである。下水道はある地下室に通じていて、そこに穴ごもりする主人公はドストエフスキー作『地下生活者の手記』(一八六四)アメリカ版を語るのだ。熊公ジャックが天井と言わず壁と言わず取りつけた一三六九個の電灯は、これまでの盲目的人生を照らし出す代償的シンボルであろう。おまけに電蓄を五台に増やして、ルイ・アームスロングが「おれは何をしたがために、こうも心暗く、うっとうしいのだろうか」と歌うのを聴きたいと思っている。だが、主人公は経験によって成長した。ホーソンはこのことを長篇『大理石の牧羊神』(一八六〇)において、「幸運な堕落」(Fortunate Fall)として描いた。

冬眠を終えた今、黒い皮膚の青年は「古い皮膚をかなぐり捨て」て、地上の春の中に出て行こうとしている。この脱皮や換毛のイメージは、十九世紀の新生派(ラルフ・ウオルドー・)エマスンやサロウが好んで用いた比喩であった。因みに、作者はフルネームをラルフ・ウォルドー・エリスンと言う。

第五話　闇に戦う愚かな軍勢(一九六八)

一九六九年七月二十一日、午前二時五十六分二十秒(グリニッチ標準時)、人類は月に到達した。その偉業は〈人類〉の名において成就されたが、月面に樹立されたのは星条旗だった。天上への「人類の巨大な飛躍」(月面第一声)は〈平和〉の名目で果たされたが、地上ベトナムで苛烈な戦争を押しつけていた軍隊の掲げたのも、同じ星条旗だった。「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、神の悦び給う人にあれ」(ルカ伝二章一四節)という天使の讃美は、新しい意味を籠めてアメリカ人

に啓示されねばならなかった。

アメリカの拡大主義が水平に伸展した先がベトナムであり、垂直に上昇した先が月面だったと見ることができよう。無人の月に向かうのも、新しいスペース（領域／宇宙）を求める使命感のなせる業だった。ノーマン・メイラーが『月にともる火』（一九七一）で「モウビ・ディックの白より白い」と呼んだアポロ11号が発射された瞬間、テレビ画面に「上昇から」FROM UP-LIFT と出て、「使命達成へ」INTO MISSION と続いた字幕を想起されたい。アメリカ人は植民の当初から一貫してミッショナリーだったのだ。

月世界征服は宇宙飛行の先輩ソ連に対して胸のすくような快挙だったが、ベトナム戦争は合衆国の「多数から成る一体」と記した国章リボンを分断した。ノーマン・メイラーのノンフィクション・ノベル『夜の軍隊』（一九六八）は、丘の上の町ならぬ、キャピトル・ヒルでの戦争反対デモを記録したものである。この全米図書賞、ピューリッツァ賞受賞作のタイトルは、その百年前に発表されたマシュー・アーノルドの名詩「ドーヴァの浜辺」（一八六七）の結び「われら現世にあるさま、暗き平野に愚かな軍勢、夜に撃ち合い、雄叫び入り乱れ、戦いせめぐに似たる」を踏まえており、『マクベス』の有名な台詞「喧騒と怒号」と同じく、一種の虚無感を漂わせている。

保守的進歩主義者を自認するメイラーは、面白半分で真剣だった。演説ではワイセツな四文字言葉を投げつけて政府の好戦主義「ウォーガズム」（war＋orgasm）を非難した。もっともワイセツなのは戦争だった。今は自己の思想のために投獄される覚悟もできていた。確かに、メキシコ戦争反対の納税拒否により投獄されたサロウの前例はあった。だが、生涯独身だったサロウは一晩で釈放されたことに不満だった――「政府が不正な戦争をしている時、正しい者のいるべき場所は牢獄である」――が、メイラーは一晩で、いや一刻も早く出所して四人目の妻に逢いたくて堪まらなかっ

た。デモは象徴的行動に過ぎなかったのだ。

デモに参加した知名人は他に詩人ロウエル、言語学者チョムスキー、わが国でも育児書でなじみ深いスポック博士などがいた。その他大勢の参加者は都市中産階級の息子や娘、いや中産階級からの逃亡者たちだった。これが労働者階級から成る軍隊や警官に素手で立ち向かったのである。労働組合はマルクスよりマフィアの近くにいた。警官は小都会型の人間によくある虚ろな眼をしていた。取材の記者は盲滅法に振りおろされる警棒で眼を殴打されて初めて眼が睚め、デモ隊支持の記事を書く気になった。デモ隊は、仮装行列と勘ちがいした連中に満ち、中には『目に見えぬ者』に出てくるクロード・レインズそっくりの男もいた。

新世界のブタ箱にぶち込まれる何年も前から、メイラーは新監獄、新大学、新病院、新工場、新空港など、現代建築のかかえる疾患を指摘していた。(現在、せまい三田キャンパスの中庭を更にせばめて建設中の、雑居ビルのごとき外観の新図書館ビルも、環境破壊の手近な見本であろう。) 加えて全体主義的ハイウェイ、全体主義的スモッグ、全体主義的冷凍食品、全体主義的マスコミ。癌のように拡大する都市と巨大企業は国内でゲットーの暴動を生み、海外で戦争を惹き起こす。メイラーは釈放された時、戦争は「この共和国の基礎、キリストに対する愛と信頼である共和国の根底を破壊するだろう」と演説した。「戦いの祈り」を批判したかの老人は、現代においてワイセツ語を吐き散らす異教徒、ユダヤ人作家の姿で出現したのだった。

結びに　加州ホテル（一九七六）

ニューヨーク市のコロンビア大学で起きた一九六八年の大紛争は、ハーレムと隣接する公園に大学体育館を建設する

計画が火種となって燃え上がった。さらに、ペンタゴンのため十二の大学が組織したＩＤＡ（防衛分析研究所）が、ベトナム戦争協力の元凶と目された。これは同じ年、慶應義塾大学で起きた「米軍資金導入反対闘争」と軌を一にする。紛争解決に苦慮された、時の文学部長池田彌三郎教授は、言わば世界史の潮流に巻き込まれたのである。

コロンビア大学紛争を題材に、学生が書いた青春小説が『いちご発言』で、わが国ではジェームズ・クネン著『いちご白書』として知られているが、著者名（Kunen）はキューナン、頭韻を踏んだ原題（*The Strawberry Statement*）は、当時の大学院副部長ハーバート・ディーン教授が表明して物議をかもした、左の発言を指している。

> もし五百人の学生がＩＤＡとの協力関係に賛成し、三百人が反対したならば、［ＩＤＡとの］関係を断つつもりかと私は質問を受けた。ほかに何の判断の材料も与えられないならば、それは主観的な好みの問題とならざるをえず、ちょうど学生がイチゴが好きだ嫌いだと主張していると告げられるのと同じことだと思われる。（調査委報告『コロンビアの危機』、一九六八）

だが、学生や住民は、大学がそれまで地域社会に何の相談もなく百五十の建物を買収し、一万人の黒人を立ち退かせたやり方が――この大学の財力よ――今度も繰り返されたことを問題とし、体育館はコロンビア（合衆国の別名でもある）拡大主義のシンボルと見なしたのである。大学はアップタウンの小高い台地に存在するが、丘の上の町は他ならぬ当の町の住民に批判されたのだ。それでもアメリカの救いと思われるのは、いつまでも若々しい自浄力を失なわぬ点であろう。

大学紛争の嵐が吹きやむと、状況は反動的に保守的となり、学生はせっせと授業に出て、いやに勉強に励むようになった。七〇年代の前夜、ニクソン政権成立。やがてウォーターゲート事件起こる。世界の注目は、またもや首都ワシントンに集まった。ニューミュージック全盛時代の到来。クイーンの「ボヘミアン・ラプソディ」と並ぶ傑作として、イ

ーグルスの「ホテル・カリフォルニア」が高く聳え立つ存在を示した。

ぼくがハイウエイを飛ばしていると、行く手に人家の灯が見えた。今夜はあそこで泊めてもらおう。折しも教会の鐘が鳴る。ここは天国か地獄か。戸口に立つ女がひとり、燭台を手に案内してくれる。奥から声あり、「ホテル・カリフォルニアへようこそ」。かつての華やかな舞踏会が偲ばれる。ぼくはワインを注文した。すると「そういう酒は一九六九年以来、ここには置いてありません」という返事。女が言った、「あたしたちはみんな、ここに縛られているのよ。自業自得だけれどね」と。支配人の部屋をのぞくと、みんなで一匹の獣にナイフを突き立て、殺そうとして殺せないでいる。ぼくは夢中で出口へ走った。どうしても元の道に戻らなくちゃ。だが、そこへ夜勤の男が出てきて、こう言った、「お客さん、いつでもお好きな時にチェックアウトはできますけどね、でも、出て行くことはできませんよ」

これはまた実に奇怪な物語である。しかも技巧の極をゆく鋭いギターワークとコーラスの、全曲に漂う深い悲しみと絶望感――。イーグルス自身の説明で、この曲は「ワールド」を歌ったものだと伝えられる。わが国のさる音楽評論家は、連中は曲がヒットしたので大きなことを言うと評したが、果たしてそうだろうか。この語を自己の置かれた「状況」と解釈すれば、先の歌詞に次のような裏の意味を読み取ることが可能ではあるまいか。

アメリカ人は長い戦争に疲れて新政権を望み、燭台を手に入口に立つ自由の女神に導かれ、カリフォルニアを根城とするニクソン派に身を委ねた。だが、活気に満ちた六〇年代は、一九六九年の政権成立をもって終焉を告げ、もう「そういうスピリット（酒／精神）はここにはない」のだ。こんな状況に束縛されるのも自業自得か。大統領執務室では寄ってたかって水門事件に刃を振るっているが、もみ消そうとして叶わない。正道に戻ろうにも出口なし。政権交替はいくらでもできようが、アメリカ人であることをやめるわけにはいかない。

アメリカ合衆国の国章は、国鳥ボールド・イーグルを描いている。イーグルスは確かに、自己の状況を正しく認識し

ていた。

〔付記〕都市とアメリカ文学に関して、更に的をしぼった研究をしたいと望む学生諸君のために、次の二著を挙げておこう。

1、刈田元司編『都市と英米文学』（研究社、一九七四）

2、ブランチ・H・ゲルファント著『アメリカの都市小説』（一九五四、邦訳、研究社、一九七七）

なお、第三話「卵」の梗概は次掲書所収の拙文を用いた。転載を許可された研究社出版株式会社に感謝の意を表する。

＊大橋吉之輔編『アンダソン』（20世紀英米文学案内8、研究社、一九六八）